

Title	龜ヶ岡遺蹟：青森懸龜ヶ岡低濕地遺蹟の研究(三田史學會編, 有隣堂刊)
Sub Title	
Author	河北, 展生(Kawakita, Nobuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1960
Jtitle	史学 Vol.32, No.4 (1960. 4) ,p.106(496)- 108(498)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19600400-0106">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19600400-0106</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 書 評

### 「龜ヶ岡遺蹟」

—青森縣龜ヶ岡低濕地遺蹟の研究— (三田史學會編) 有隣堂刊

青森縣龜ヶ岡遺蹟は、此處に今更説明するまでもない有名な遺蹟であるが、その特色である華麗な完形土器を多出するため、亂掘され、學術調査の行い難い状態に陥る危険に迫られていた。こうした實情の爲、指定遺蹟であり乍らも、特に發掘調査の許可があつたのである。それ故、昭和二十五年八月に行われた慶應義塾の發掘調査は貴重な意味を持つのであり、清水潤三氏の執筆された本書の特別な意義が認められるのである。

爾來十年に近い年月を経て此處に報告書の刊行を見たのであるが、その間或は附近の同種遺蹟の調査を行い、それらとの對比研究等は勿論、報告書の隨所に、從來の研究とは異つた角度よりの考察も加えられ、誠に示唆に富む問題の提示が行われている。また全編に流れる態度としては、出土資料の紹介に出来るだけ客觀性を與えようとの努力がみられる事で、出土土器のほとんど全部を圖版として示している如きはそのあらわれで、斯かる態度の報告書はその例が少く、この點今後の研究に資するところ大なるものがあるといわねばならない。

龜ヶ岡遺蹟については、明治二十七・八年に佐藤傳藏氏により大規模な發掘調査が行われて以來、途中、中谷治宇治郎氏の試掘等が行われてはいるが、今回の調査迄約五十年間、學術調査は行われて居らず、爲に、佐藤氏の報告と相當異なる見解を出しているのは、考古學自體の進歩の結果として當然ではあるが、特にその遺蹟成立の原因を、靜水狀況下に於て出来る粘土層中より、完形土器を含めて多くの遺物の出土した事實より、これが佐藤氏の云ふ如き津浪の如き一時的現象により成立したものでなく、貝塚同様、多年に亙る石器時代人の廢棄物により作成された遺蹟であると斷じ、その際問題となる華麗なる完形土器の多出現象についてはその出土狀況が或る種の組合せを持つて小範圍より群出する傾向に注意し、この特色が龜ヶ岡附近の同種遺蹟に共通に認められることを傍證として特種な宗教的行爲に依るものと解釋している。

また華麗な精製土器は、龜ヶ岡の代表的土器と目され、其の量の多い事を想像し勝ちであるが、土器口邊部或は底邊部の集計を試み、精製土器と粗製土器との數量的比較をなし、意外に精製土器出土の比率の低い事を實證している點は注目されることである。

これらの土器の分類について、本報告では、「所謂龜ヶ岡式土器は山内清男氏の研究によつて、大洞B、B'、C、C1、C2、A、A'の六型式に細分されていることは衆知の事實である。しかし、

その大要は公表されているものの、細部に互っては據るべき發表がなく、研究者各自の主観によって、分類の結果に差異が認められる。加うるに文様その他著るしい特徴を持つものは識別が容易であるが、特徴の明らかでない粗製土器などについては、細かい型式の決定が困難な場合が多い。それ故、ここでは型式の細分にこだわることなく、主要包含層出土のものを一應同時に存在したものと認め、特徴顯著なもののみを採り上げて検討を加える方法をとった。特にB、C式は特別に分離して説く場合の外はC1、C2と共に一括して「C系統」とし、A、A'も「A系統」として扱ったが、これは細分による個々の時期を把握するに足る層位、その他の徴證を見出し得なかつたためである。むしろ二、或いはそれ以上の型式に互る土器が同時に併存使用された疑いが濃く、そのような事業がむしろ當然の文化現象とすら考えられる。」と述べて、型式細分類方策によらないことを明らかにしていることである。

このことは所謂型式分類が或る意味で編年的意味を持つが故にとられた態度とみられるのである。長期に互る文化現象を見るとき、其處に自から時代的特色が現われ、したがってその特色の故に新古の差異を付け得ることはいうまでもない。したがって型式分類が或る程度の編年的意味を持つことも亦認められねばならない。然し比較的短い時期に於いて、然も或る程度内容の充實せる文化にあっては、そこに行われる文化が必しも一

種に限られるということは考えられない。したがって、型式分類が編年的意義を持ち得る點には、或る種の限界があるといわねばならない。また文化程度が餘り高くないとき文化の傳播に或程度の時間を要するものであるが、その時間は、必しも一定してはいない。假に或る特定の遺蹟が営まれた比較的短い時間を問題にした場合、そこに多少の差異ある型式が併存する事は充分考えられるところである。此の意味で、本報告が、層位其他の點に於いて、特に區別せねばならない徴候を認め得ないことを以て、型式細分を採用しなかつたことは、充分意義あるものといわなければならぬ。

龜ヶ岡遺蹟出土の石器、木器、骨角器の製法が、土器製作の技術に比し一見頗る粗雑に見られる現象について、これが技術の幼稚さに依るものでなく、鋭利なる用具に依り、僅少の加工により所望の形に近いものを作り上げる事が出来たためであろうとし、金屬器使用の可能性が一應考えられもすると述べていることは、特に注目すべき見解といわねばならない。

報告書はそれ以上について述べて居ないが、金屬器の存在を想定すれば、當然金屬器使用文化との接觸を考えねばならぬ。したがって金屬器文化を大和民族に求めるのが自然であるから、龜ヶ岡文化人の生活した時期に、すでに大和文化が東北地方の北端にまで及んでいたと考えねばならず、そのことから、繩文文化の終末期が可成り延長され、より高度の文化と接

触しつつ、繩文文化を繼續していたと考えねばならない。

斯く考え來ると、自然遺物の項に於て考察している如く、充分の注意が拂われたにも拘らず、動物の遺骸が意外に少く、植物性食料への依存度が相當高いとみななければならぬと考えられる事、一方植物性遺物について、花粉分析の結果をも参考にしても、猶且食料植物と考えられるものの種と量の絶對的不足の事實から、他にこれを求めねばならぬとしている點は、或る種の農業或はそれに近い工作の存在を想定しているのではないかと憶測されるのである。

ともあれ金屬器存在可能の問題は、先述の如く、蝦夷という歴史分野の問題とも深い關連を持つばかりでなく、當然石器時代人種論にも關係する重大な問題の提起といわなければならぬ。

本報告の根本的な研究態度は、自然遺物、或は土器以外の人工遺物、特にその技術等の諸點にも深く注意し、例えば石鏃の大小、形態の相違等が、使用目的に應じた區分に依る結果ではないかといった考察を加えたり、土器様式が同一であっても、貝塚人と然らざるものとの間に、生活様式、特に食料の如きに相違がみられるのは當然であろうと指摘している如く、土器にのみ考察の重點を置く事なく、一應文化内容全般を考慮しているということである。考古學が編年的研究或は土器様式の細分へのみ重點を置いて、遺蹟自體の全般的文化内容の考察を輕視

する事は、決して望ましい事ではない。その意味で本報告書の態度は、今後の此の種報告書のとる可き態度について、一つの行き方を提案しているものともみることが出来るのではないだろうか。

猶本報告では、考古學以外の分野の學者の援助を受け、花粉分析、或は植物鑑定、塗料の化學分析等の結果を利用してゐる。こうした研究態度は、次第に一般化する傾向を示しているが、花粉分析は、慶應義塾がさきに加茂遺蹟の調査の際初めて試みたものであり、塗料或は藍胎漆器本體の研究の如き、從來の肉眼に依る判定を科學的に確認せんとする研究態度であつて、漆以外の塗料の存在が明らかとなり、藍胎漆器の本體が、本遺蹟出土のものが竹の一種である事が確認されるなど、地味な基本的研究が行われている。この様な研究態度は、今後一般化され、多くの信賴すべきデータの出揃う事により、考古學自體の發展に大きな貢獻をなすものと考えられる。

以上注目すべき二三の特色と問題について述べた所で明らか如く、本報告書は考古學研究が、從來の研究態度のみでは打解出来ない幾多の問題に直面している時、その研究方法に對する一つの行き方を示すと共に、學界に極めて重大な幾つかの問題を提示した注目すべき報告書といわねばならない。

(河北展生)